

## 音楽科総論

### テーマ 「豊かな心を育てる」音楽活動

#### ○テーマ設定理由

学習指導要領においては、生徒の個性を生かし、主体的な学習態度を育成するために、表現活動の選択ができるようになっている。このことは、一人ひとりの生徒が生涯を通じて、音楽を愛好し、音楽と関わることによって、より心が豊かになっていくことを重視している。そのためには、音楽の授業では、音楽の楽しさや喜びを味わわせ、音楽嫌いの子どもを生み出さないことが大きな課題となる。しかし、音楽活動の楽しさは、実に多様であり、その様々な活動の中から、子どもたちのひらめきが見られたり、音楽的な感性に優れていることが発見できる子どももいる。これは、特に「幅広い活動を通して」と示されているように、子どもたちが楽しく主体的に音楽と関わるためには、子どもたちの個性や興味・関心に即した多様な音楽活動が必要になってくるということである。

#### ・学びを拓く音楽活動

音楽科の学びを拓くということは「自分の音楽性に気付き、そこから楽しく音楽に関わること・生きた音楽体験、すなわち自ら音楽することをもって自己表現をなしえるという体験を持つこと」と考えている。

体験を通して得た感動や喜びが、生涯にわたって、音楽と関わり続ける原動力となることを考え、その原動力が「豊かな心」ということにつながるであろうと考える。そこで、「豊かな心を育てる音楽活動」とテーマを設定した。

学校における学習としての音楽の取り組みは、一言で言えば、能動的に音楽に触れるということである。言い換えれば、表現手段としての音楽を身につけることである。知識・技能的なものを含めて、音楽が自らを表現する手段であることを学習を通して自覚させたいと思う。

すくない授業時間数の中で、様々なことに取り組みながら、学習の一つ一つが、具体的に課題を消化するという活動だけということに陥らず、楽しみ、かつ音楽的な力が高まることを願っている。そして、これから生きていくうえで心の糧となるような取り組みの成果を上げさせ、今後も音楽を通して豊かな心を育むことにつなげたいと考えている。

#### ・基礎・基本の定着

音楽科でとらえた基礎・基本とは、「生涯にわたって楽しく充実した音楽活動ができるための力」すなわち、音楽の諸要素を感受する力、自分のイメージをもって表現する力とする。

中学校音楽教育にとどまらず、子どもたちが人間性を豊かにするための必要不可欠なものであるといえる。そのため、音楽の授業においては、「音、音楽に対して、主体的、創造的に関わり、楽しむ場の設定」、「学習教材や課題への関わり（様々な音楽にできるだけ多く接し、味わえるようにする）」、「子どもが主体的に活動する場の設定（個と集団の関わりの中での活動を工夫する）」、を常に念頭に置いて学習を構成している。

個々のふり返りについては、自己評価、相互評価において学習意欲の喚起としている。これは自分の音楽性を確認し、自己を高める表現力に大きく影響する。「歌うことを苦手とする子どもが、周囲のエネルギーに感化され、いつのまにか大きな声を出して自己表現していた」「楽器を演奏することが嫌いな子どもがグループ活動によって教えられ、演奏することができるようになった」「興味関心を持っていなかった楽器に触れることによって、新たな興味を抱くことになった」、これらは、音楽の授業のなかでは、当然考えられることであるが、それが基礎基本の定着を目標にした指導であり、評価の一体化となることを、今あらためて再確認し今後も考えていかなければならない課題といえる。

#### ・「自己を表現し、コミュニケーションする力」

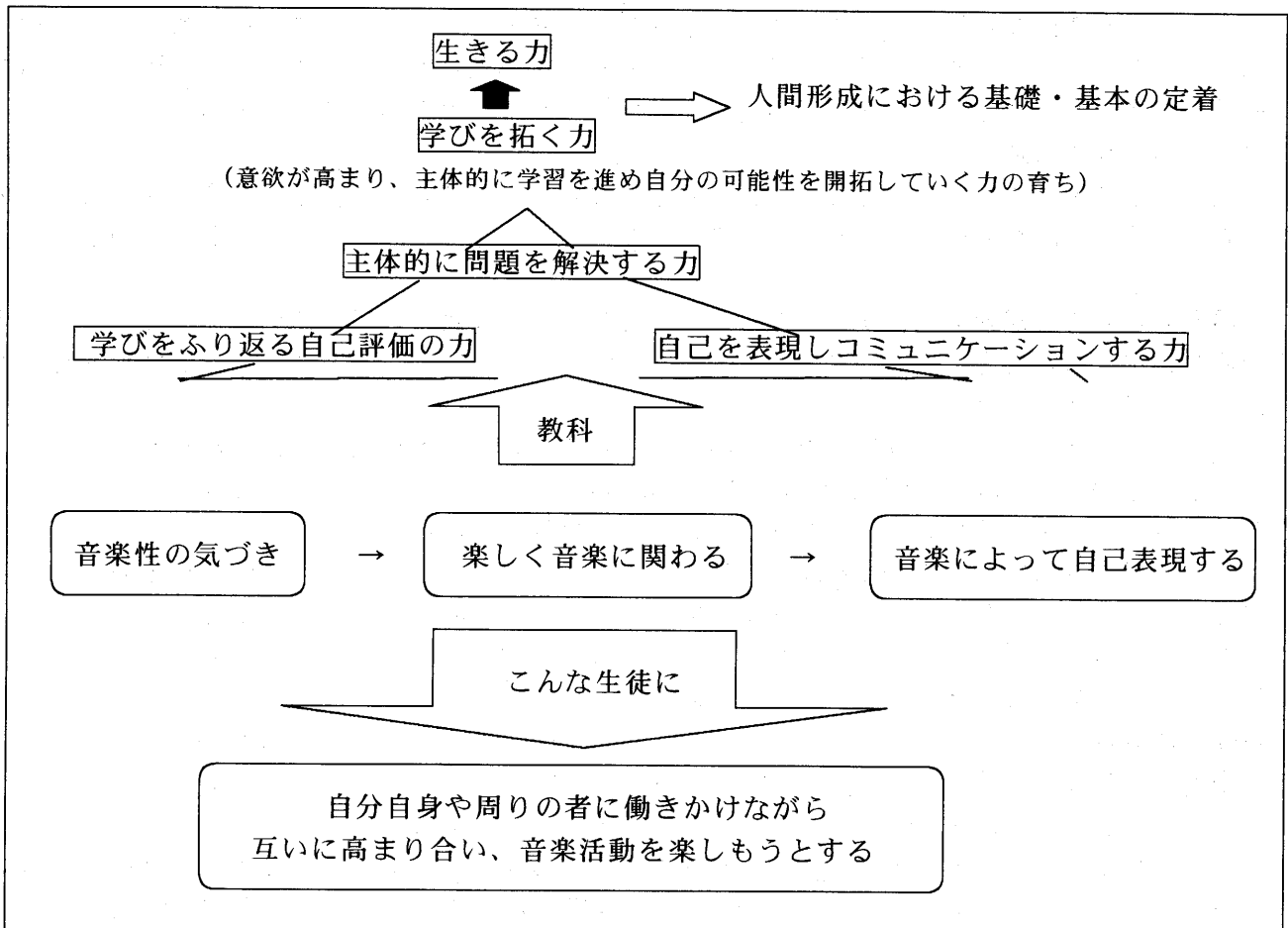
また、本年度「自己を表現し、コミュニケーションする力」においては、音楽にふれることで自己の内に生じたものの共感の成立が、音楽科におけるコミュニケーションととらえている。その媒体となるのが、言語（理論性）・身体による表現（技術・感性）である。

言語は、響きや旋律、律動と言った具体的な刺激を抽象化することで、技能が伴わずともその特性や内容を共有することを可能にする反面、あくまで抽象化された情報が具体化することはない。

技術・技能は、音楽そのものを表現することで、思いの共有を可能にする。ただ、そこには求められることをすべて表現するという技能が伴わない限り、のぞむ形での共感を得られない。

互いに補充するところがあるとはいえ、言語は理解の共有、技術は感動（心の動き）の共感を支えるものであり、この両者のバランスのとれた習得と、そのための経験の機会こそ、音楽教育を通して求めていくべきであると考えている。

[研究にあたって] …… こんな生徒に育てたい



私たちの大きな目標は、生涯にわたって音楽を愛好する生徒を育てることである。義務教育での9年間で子どもたちが音楽に親しみ、それをもとにして生涯にわたって音楽と関わってほしいと願うのは音楽科の教師なら誰しも同じ気持ちであろう。

しかし、学校における音楽教育は、6年間と3年間というような意識を自分自身が持っていたのではないか、9年間という長いスパンで考えてはいなかったのではないかと思う。

授業が削減されている現状、9年間の中で中学校音楽教育ではどのようなことができるかを考えると、小学校での活動を教えて頂くことによって、もっと中学校での音楽活動を充実させることができるのではないかと思う。

実際、隣接する小学校からは「音楽大好き」といった子どもたちに授業で出会う。様々な音楽を耳にし、自分の音楽を持っている子どもたちである。その子どもたちが中学校の授業でさらに自分の持っている音楽を自分で表現できる子どもたちに育てなければならないと考えている。そのための指導のあり方を考えることが私にさだめられた使命ではないかと思う。そして、豊かに表現する力を持って音楽を感じることをできる生徒として中学校を卒業してもらいたいと願っている。

## 実践例 1年生

① 題 材 ～箏をひこう～

② 題材について

### ○自国文化理解のための和楽器の演奏

子どもたちは、メディアを通じて耳にすることはあっても日常生活の中で箏曲などの我が国の伝統的な音楽に接する機会はあまりない。そこで、音楽の授業においてその機会を持ち、日本の伝統的な音楽の特徴や魅力があることを発見し、日本の音楽に対する興味・関心を持つことをねらいとしている。国際化が進む中、我が国の国民性を大切にし、音色等からなる日本音楽のすばらしさを世界に誇れる人に育ててほしいと願っている。1年生では、箏を実際に体験し、特徴を感じ取らせることにより、その魅力を味わわせることから、その意識をもたせたいと考えている。

### ○基本奏法の定着

v

本題材の目指すところは、箏の実習体験による日本音楽の魅力の発見などにあるが、演奏に必要な技術が身に付いていなければ、演奏を楽しむことも、楽曲の味わいを感じることもできないであろう。器楽演奏においては、初歩段階でしっかりと身につけておかなければならない基礎知識や基礎動作がある。これをおろそかにしてしまうと、その後の発展はむずかしい。しかし、中学校の授業時数は限られている。時間の範囲で絞り込んだ内容をより効率的に指導しなければならない。そのため、授業形態をペアによるものとした。しっかりと身につけさせたい基礎事項は、ペアで確認しながら進め、さらに今回は他者に伝達、ということによって基礎技術の定着をねらうこととした。

本校の音楽科でとらえた基礎・基本とは、「生涯にわたって楽しく充実した音楽活動ができる力」すなわち、音楽の諸要素を感受する力、自分のイメージを持って表現する力とする。中学校の音楽教育にとどまらず、子どもたちが人間性を豊かにするための必要不可欠なものであるといえる。そのため、音楽の授業においては、①「音、音楽に対して、主体的、創造的に関わり、楽しむ場の設定」②「学習教材や課題への関わり」③「子どもが主体的に活動する場の設定」を常に念頭において学習を構成している。

学校における学習としての音楽の取り組みは、一言で言えば、能動的に音楽に触れるということである。言い換えれば、表現手段としての音楽を身につけることである。知識・技能的なものを含めて、音楽が自らを表現する手段であることを学習を通して自覚させたい。少ない授業時間数の中で、様々なことに取り組ませたいと考えている。そのために、一つ一つの具体的な課題を消化するという活動には陥ってはならない。

また、本年度、「自己を表現し、コミュニケーションする力」においては、音楽にふれることで自己の内に生じたものの共感の成立が、音楽科におけるコミュニケーションととらえている。その媒体となるのが、言語（理論性）・身体による表現（技術、感性）である。

言語は、響きや旋律、律動といった具体的な刺激を抽象化することで、技能が伴わずともその特性や内容を共有することを可能にする反面、あくまで抽象化された情報が具体化することはない。

技術・技能は、音楽そのものを表現することで、思いの共有を可能にする。ただ、そこには求められることをすべて表現するという技能が伴わない限り、のぞむ形での共感を得られない。

互いに補完するところがあるとはいえ、言語は理解の共有、技術は感動（心の動き）の共感を支えるものであり、この両者のバランスのとれた習得と、そのための経験の機会こそ、音楽教育を通して求めていくべきであると考えている。

### ③学習目標（評価規準の設定 基礎・基本）

基礎・基本	学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・箏の演奏により日本音楽の魅力を味わう。</li> <li>・箏の奏法の特徴を理解し、いろいろな表現方法を体験する。</li> <li>・表現するための音楽的な基礎・基本を体得し、自分の思いを大切にしながら豊かに表現できる</li> <li>・演奏を聴き合うことによって、お互いを高め、さらに次への表現へと高めるようにする</li> </ul>
音楽への関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>①進んで活動に取り組もうとしている</li> <li>②我が国の音楽や楽器に関心を持ち、意欲的に演奏、表現しようとしている。</li> <li>③仲間といっしょに音楽を楽しもうとしている。</li> </ul>	
音楽的な感受や表現の能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>①箏の響きや日本音階の特徴などを感じ取っている</li> <li>②自分の感じたことを発表し、表現工夫に参加する。</li> </ul>	
表現の技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>①箏の特徴を理解し、正しい奏法で演奏するための技能を身につけている。</li> <li>②お互いを聴き合いながらよりよい表現を求めて演奏することができる。</li> </ul>	

（学習活動における具体の評価規準）

音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能
<p>（第一時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箏に対して興味・関心を持って取り組むことができる</li> </ul> <p>（第二時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「さくらさくら」を箏で演奏することに意欲的である</li> </ul> <p>（第三時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の音階の特徴を探す活動に意欲的に取り組んでいる。</li> <li>・自己の学びをより理解しようとしている</li> </ul>	<p>（第一時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箏の響きを感じ取っている。</li> <li>・基礎事項について理解できる。</li> </ul> <p>（第二時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お互いの演奏を聴取しあい、数字譜どおりに演奏されているか、正しい音程になっているかを感じ取る。</li> </ul> <p>（第三時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の伝統的な音楽の特徴を感じ取ることができる。</li> </ul>	<p>（全時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・箏の右手の基本的な奏法で、「さくらさくら」を演奏するための技能を身につけている。</li> </ul> <p>（姿勢）（爪の使い方）</p> <p>（腕の使い方等）</p>

④学習計画（全八時間）

学習過程	学習の中心	基礎・基本を定着させるための視点	「学びの拓き」に関わる力	観点
第1時① 箏について理解する	・箏について 歴史、構造(楽器の各部の名称) 爪を作る 作法を学ぶ	・日本の音楽に関心を持つ ・箏について理解する ・作法や奏法を理解する	課題をとらえる力(問題)  箏について理解しようとする力	関心 ①② 感受 ①
第2時② 箏をひく	・箏の音を出す 動作、作法 爪のあて方 絃と数字譜の関係について	・姿勢や音に視点を置き、豊かな音だしができるようにする。 ・音色を感じ取る。 ・ペアによって学習をふり返る ・積極的に話し合いに参加させる	箏の演奏に積極的になる力(表現)  課題を構成しとらえなおす力(問題)(コミュニケーション)	関心 ①③ 感受 ②
第3時⑤ 「さくらさくら」をひく ひき方に気をつけて箏の響きを感じ取る  日本の曲をひく	・箏をひく 「さくらさくら」の練習 手の形 絃のひきかた  ・箏の練習 日本の唱歌等、簡単な曲を練習する  独奏とお互いの演奏の感受	・基本的な作法や奏法を確認する ・意欲的に活動する ・豊かな音を奏でることに関心を持つ ・楽曲が持っている音楽的な特徴(リズム、旋律)を感じ取らせる ・様々な特徴をとらえて、表現する。  ・演奏を通して仲間意識を強める ・観点にそって記述させる	表現に積極的になる(問題・表現)(コミュニケーション)  音楽的な表現の技能(表現)  意欲的に表現する(コミュニケーション)  課題を共有する力(問題)	感受 ①② ③ 技能 ①② 感受 ② 技能 ①② ③

⑤本時の目標 付評価基準表

- 「さくらさくら」を箏の響きを感じながらひく（関心・意欲・態度）（感受）
- 既習事項を見直し、自己の学びをふり返る（関心・意欲・態度）（表現の技能）
- 楽しく活動に参加する

関心・意欲・態度	意欲的に活動に取り組む 箏を演奏することに関心を持っている 積極的に教えようとしている	ペアでの学習と全体の活動に参加している 自分の曲を練習している 学びのふり返りをしている	自己評価 相互評価 教師の観察
表現の感受・技能	音楽的に表現を工夫している 表現にふくらみを感じられる	正しい音程やリズムで演奏している 表現を工夫しようとする	自己評価 相互評価 教師の観察

⑥本時の展開（四時間目）

学習活動	教師の支援	備考
<ul style="list-style-type: none"> <li>○あいさつする</li> <li>○既習事項を確認する（おさらい）</li> <li>○「さくらさくら」を演奏する</li> <li>○本時の学習内容について、目当てを確認する               <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで今まで学んだことを伝える</li> <li>・自分の学びをふり返り、他者に伝達する</li> </ul> </li> <li>○「さくらさくら」を演奏する</li> <li>○自己評価（成果と課題を把握）</li> <li>○友達評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作法の確認をする</li> <li>・活動の心構え、準備を 意識する</li> <li>・箏の響き（和）を感じる</li> <li>・今までの学習内容をここに想起するだけでなく、全体的な流れをとらえるようにする</li> <li>・自己の学びをふり返り、確実に自分の力をつけることができるようにする</li> <li>・ねらいを持って活動にあたるようにする</li> <li>・練習の過程を見て、少しだけでも発表できるようにする</li> <li>・活動のふり返りを記述させる</li> </ul>	<p>ワークシート</p> <p>相互評価 自己評価</p>



⑦結果と考察

「箏」を経験していない生徒がほとんどである。今まで「お琴」と思っていた楽器は、実は「箏」という楽器だった。そこからこの授業は始まった。和楽器や日本の音楽に親しむ機会がほとんどなく、経験もない。伝統音楽にふれる、とか特徴をつかむ、国民性を大切にする等、自国文化理解という目標で取り組んだが、子どもたちは教師のそんな想いを知ってか知らぬか、うれしそうに興味深く「箏」の前に正座した。それだけで気の引き締まる経験をした子どもたちがかなりいた。

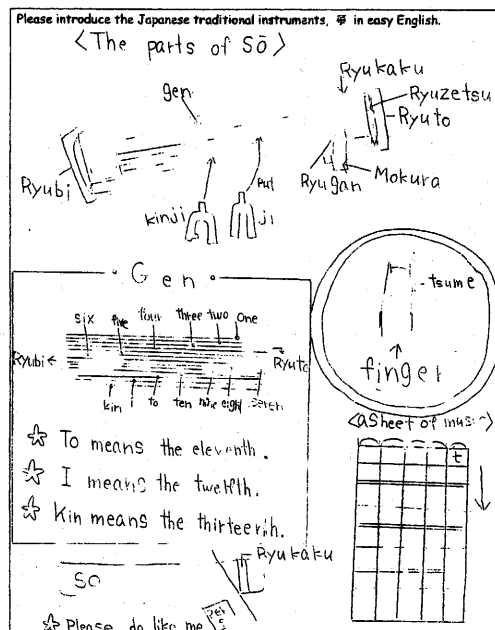
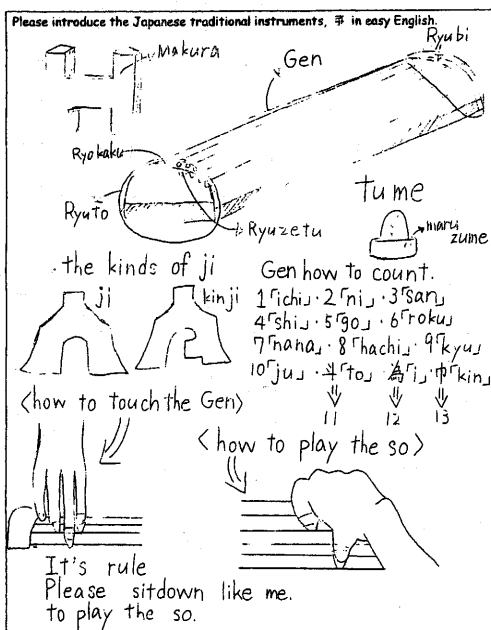
和楽器に取り組む場合、とにかく楽器にふれて経験させる。これは授業時間の関係で細部にわたって指導する時間がないからなのか、あまり作法や技法は重視されていなかったのではないかと思う。しかし、今回の授業では、作法や技法にもこだわってみた。正座、今時の子どもたちは正座をしたこともない。最初の一時間は、それはもう悲惨な状況だった。それが、時間がたつにつれ、二時間目以降、素晴らしい姿勢でお行儀よく座ることが出来るようになる。きっちり座ることが出来れば、音が変わる。一つの絃（いと）をはじくだけでも響きが違う。子どもたちは、はっきりとそのことを意識できたようである。

基礎知識や基礎作法をおろそかにしないで、演奏に必要な技術が身に付けば、演奏を楽しめるし、楽曲の味わいを感じることも出来る。初歩段階でここを押さえておけば、学習が発展していくということも十分感じられた授業であった。

また、今回、このことを子どもたちにしっかりと定着させるために、ペアを組み、お互いの学習を確認しながらすすめたのは、とても効果があった。さらに、他者に伝達する、という方法は、子どもたちの学習意欲を高め、確実な力を身につけることができていた。子どもたち一人一人がそれぞれ自信を持ち学習に臨んでいた姿に感銘を受け、今後もより効率的に学習できる場を考えていかなければならないと切に感じた。

(参考資料)

この授業を受けて、11月に本校でさだめる国際理解教育の授業において、「箏をひこう」を英語バージョンでおこなった。各国の留学生に「箏」を英語で伝えることが出来るように、もちろん留学生が弾けるように子どもたちが指導するのだが、子どもたち自身が感じ取った学びを上手く伝えることが出来たようである。



「等」をひこう 目録( )		1年( )組( )番 氏名( )
目録( )		チェックした人( )
練習確認カード		
演奏姿勢	1 正座がきちんとできている。 2 踵角の延長線より、やや内側に身体を右側面が添っている。 3 マリオネットのように、顔、両肘が弦に引上げられている(手を下ろしていない)。 4 左手の指先がほぼより垂直に弦に触れている。(手を下ろしていない)。 5 肘から下に垂直な力の流れが伝わり、やわらかく伸びている。 6 右手薬指、小指は力をいれず軽く伸びている。(自然に弦に触れても可、弦を持つことは不可。) 7 はめた季爪の先端を自分の指先と触れ、弦を弾いたり、手を滑らせたりすることができる。(爪爪の場合爪の先、角爪の場合は爪の角の部分を爪の先端とする。) 8 弦を弾いた後の力のため方、抜き方を意識することができる。(拍数分音を伸ばそうとしているか)	1回 2回
弾き方	1 しっかりと指だけで弾くこと、腕でプレスをして弾くところを使い分けられること。 2 練習を止めた後、息を吐きながら、一から市まで階名で弾くことができる。 3 練習を弾くことができる。 4 前奏部3小節目を中指で弾くとき、①手首から動いている、②拍目の穴を弦の下からすくい上げて弾くことができる。 5 さくらさくらの中で歌い、しっかりと呼吸をしながら弾くことができる。 6 弱押し(ワ)と 強押し(オ)を使って音高を操作することができる。 7 弱押し(ワ)と 強押し(オ)をさくらさくらの曲の中で実際に弾く。 8 以下の楽法の意味がわかり、さくらさくらの後奏の中で使うことができる。 ① 握爪 ② 割爪 ③ 敷し爪 ④ 煮し爪 ⑤ 合わせ爪	
さくらさくら		

「等」をひこう 目録( )		1年( )組( )番 氏名( )
目録( )		
練習確認カード		
演奏姿勢	1 正座がきちんとできている。 2 踵角の延長線より、やや内側に身体を右側面が添っている。 3 マリオネットのように、顔、両肘が弦に引上げられている(手を下ろしていない)。 4 左手の指先がほぼより垂直に弦に触れている。(手を下ろしていない)。 5 肘から下に垂直な力の流れが伝わり、やわらかく伸びている。 6 右手薬指、小指は力をいれず軽く伸びている。(自然に弦に触れても可、弦を持つことは不可。) 7 はめた季爪の先端を自分の指先と触れ、弦を弾いたり、手を滑らせたりすることができる。(爪爪の場合爪の先、角爪の場合は爪の角の部分を爪の先端とする。) 8 弦を弾いた後の力のため方、抜き方を意識することができる。(拍数分音を伸ばそうとしているか)	1回 2回
弾き方	1 しっかりと指だけで弾くこと、腕でプレスをして弾くところを使い分けられること。 2 練習を止めた後、息を吐きながら、一から市まで階名で弾くことができる。 3 練習を弾くことができる。 4 前奏部3小節目を中指で弾くとき、①手首から動いている、②拍目の穴を弦の下からすくい上げて弾くことができる。 5 さくらさくらの中で歌い、しっかりと呼吸をしながら弾くことができる。 6 弱押し(ワ)と 強押し(オ)を使って音高を操作することができる。 7 弱押し(ワ)と 強押し(オ)をさくらさくらの曲の中で実際に弾く。 8 以下の楽法の意味がわかり、さくらさくらの後奏の中で使うことができる。 ① 握爪 ② 割爪 ③ 敷し爪 ④ 煮し爪 ⑤ 合わせ爪	
さくらさくら		

4/4 た く ら た く ら (平調子 ミラ シド ミミ ヲラ シド ミミ ヲラ シド ミミ ヲラ シド ミミ ヲラ シ)

八	十	五	七	七	七	七
一	九	四	七	七	七	七
九	十	五	八	八	八	八
六	斗	六	◎	◎	◎	◎
一五	十	五	七	七	七	七
◎	斗	五	七	七	七	七
◎	五	四	八	八	八	八
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
五六	為	為	七	七	七	七
十	為	巾	八	八	八	八
五六	巾	巾	九	九	九	九
十	◎	巾	八	八	八	八
五六	為	為	七	七	七	七
五六	巾	巾	八	八	八	八
十	巾	巾	七	七	七	七
九	斗	斗	六	六	六	六
八	◎	◎	◎	◎	◎	◎
七	◎	◎	◎	◎	◎	◎

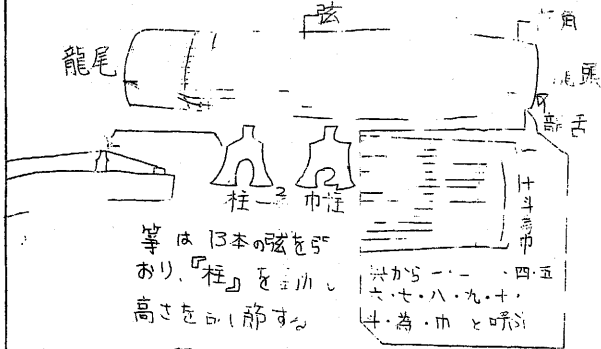
→ 握爪      → 割爪



箏をひこう

ペア氏名 ( )

箏の各部の名前



箏は13本の弦を5つあり、「柱」を動かして高さを変えられる。糸巻は「一・二・三・四・五」糸切は「六・七・八・九・十」糸止は「十一・十二・十三」と呼ぶ。

箏をひく時に「爪」を付けます。爪は、親指・人さし指・中指につける。親指は「1」、人さし指は「2」、中指は「3」という。

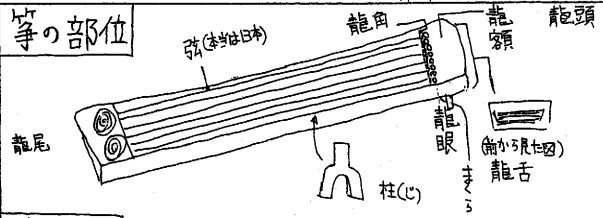
★ ひく時の注意

- ・両ひじをあげ、左うでは注より左の方の上に手を置く。
- ・すわる時に右しを龍角に合わせ、体を少し左になめにする。
- ・奥から手前にひく場合、手前から奥へひく場合は、最初にひく弦のすぐそばに2,3の指を置いてひく。
- ・最初にひく弦のすぐそばに、最後にひく弦のそばに、2,3の指を置いてひく。

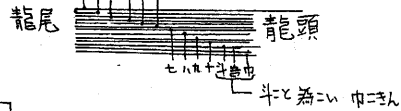
箏をひこう

ペア氏名 ( )

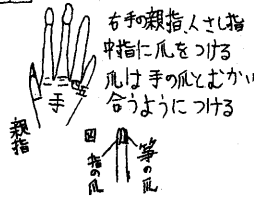
箏の部位



弦をかぞえる

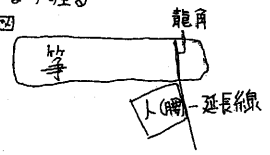


爪



座り方

- ・基本は正座
- ・龍角の延長線に腰が位置するように座る



ひき方

- ・二三の指を弦に引っかけ、親指を下から上に円を描くようにまわす。着地はひいた弦の一本前の弦。
- ・ひじをはる(あやう)人形のように、口呼吸→一章節ごとにかたをあげる。

箏をひこう 1年( )組( )番氏名( )

	6月2日(木) 5限	6月13日(月) 5限																																				
学習内容	親指のあて方 さくらさらの前 うでの呼吸 2,3の指の位置	さくらさくら前後・曲途中 フ・オ おかた 3,4の指を使った仕方 楽座の見方																																				
わかったこと	2,3の指か1の指でひいているときに支える役割。うでをあげて、呼吸させることを覚えた。	○ 相付は1指か2指か3指か4指かを一言で表す。○はたてに読める。この記号に息を付ける。なごるようにひくのがポイント。																																				
自己評価	<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価項目</th> <th>自</th> <th>友</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>しゅいはおかしかったか</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>かまえるはできたか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>うでの呼吸ができたか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>親指のあて方</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>音色がきれいだったか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	評価項目	自	友	しゅいはおかしかったか	A		かまえるはできたか	B		うでの呼吸ができたか	B		親指のあて方	A		音色がきれいだったか	B		<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価項目</th> <th>自</th> <th>友</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>しゅいは</td> <td>1</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>かまえる</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>うでの呼吸</td> <td>4</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>あて方</td> <td>3,4</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>さくらさくら</td> <td>1,2,3,6</td> <td>P</td> </tr> </tbody> </table>	評価項目	自	友	しゅいは	1	A	かまえる	3	A	うでの呼吸	4	A	あて方	3,4	B	さくらさくら	1,2,3,6	P
評価項目	自	友																																				
しゅいはおかしかったか	A																																					
かまえるはできたか	B																																					
うでの呼吸ができたか	B																																					
親指のあて方	A																																					
音色がきれいだったか	B																																					
評価項目	自	友																																				
しゅいは	1	A																																				
かまえる	3	A																																				
うでの呼吸	4	A																																				
あて方	3,4	B																																				
さくらさくら	1,2,3,6	P																																				
感想	自分の一生懸命度は A ⊕ C D E うでの呼吸をすることはとても大切なことだ。親指のあて方など色々あって、役割がたくさんあるんだなと思った。	自分の一生懸命度は？ A ⊕ C D E 最初にひいたの、フ・オの打ち方をわけていなかったの、次にかんはりたい。○ ⊕ などをおまじと覚え、演奏する時に楽譜にできるかんはる。																																				

箏をひこう 1年(B)組( )番氏名( )

	6月2日(木) 5限	6月13日(月) 5限																																							
学習内容	親指のうでをかしかけた。 オマス。 七と八の音と前そら。 うでの呼吸。 2と3の指の位置。	前そら。 中指のつづり方 フ・オ ○ ○ (かまえる)																																							
わかったこと	かまえるは、あやう人形のようにひじをはる。うでの力を抜いてかまえること。2と3の指は、	中指を「一から中指で」なごる。○ ⊕ 1音「オ」半音を(オ)ト。																																							
自己評価	<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価項目</th> <th>自</th> <th>友</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>楽座の保て方</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>かまえるはできたか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>うでの呼吸</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>音色がきれいだったか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>親指のあて方</td> <td>A</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	評価項目	自	友	楽座の保て方	A		かまえるはできたか	B		うでの呼吸	B		音色がきれいだったか	B		親指のあて方	A		<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価項目</th> <th>自</th> <th>友</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>正座をする</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>楽座の保て方</td> <td>A</td> <td></td> </tr> <tr> <td>かまえる</td> <td>C</td> <td></td> </tr> <tr> <td>うでの呼吸</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>音色がきれいだったか</td> <td>B</td> <td></td> </tr> <tr> <td>親指のあて方</td> <td>A</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	評価項目	自	友	正座をする	A		楽座の保て方	A		かまえる	C		うでの呼吸	B		音色がきれいだったか	B		親指のあて方	A	
評価項目	自	友																																							
楽座の保て方	A																																								
かまえるはできたか	B																																								
うでの呼吸	B																																								
音色がきれいだったか	B																																								
親指のあて方	A																																								
評価項目	自	友																																							
正座をする	A																																								
楽座の保て方	A																																								
かまえる	C																																								
うでの呼吸	B																																								
音色がきれいだったか	B																																								
親指のあて方	A																																								
感想	自分の一生懸命度は A ⊕ C D E 仲よくして練習する。	自分の一生懸命度は？ ⊕ B C D E 楽譜をみる、ミソ、ソ、シ、ハ、順一をい、おまじ、それから、かまえる、弦を指あけるようにする、自分では、																																							

